

きれいな水を守るために

きれいな眼の魚を探している。私は学校の部活動のサイエンス研究会で魚眼の研究をしているからだ。魚の眼は世界をどのように見ているのか知りたくて、小学生のときに興味を持ったのがきっかけである。そのときにはスーパーマーケットで新鮮な魚を買って、水晶体を取り出して実験に使い、その後に残った身は調理して、魚眼なしの鯛のお頭つきを食べたのが思い出だ。

近所の川沿いを散歩していると、ふと気が付けば魚がいないか、川の中をのぞいている。川はよどんで見えて、外来種のミシシッピアカミミガメやクサガメが甲羅干しをしている。アオサギが舞い降りる姿、鴨の親子が泳ぐ姿も見られ、のどかな気分になる。かと思えば、プラスチック製の袋や空き缶、ペットボトルもよく見かける。通学時に、ゴミ袋を川に堂

奈良女子大学附属中等教育学校 二年

三浦 悠雅

堂と投げ込む人を見てぎよつとしたこともある。そういうわけで、私の住んでいる奈良県や大阪府をまたがって流れている大和川は、イワナやヤマメ、鮭や鮎が棲むような、美しい川ではないと思っていた。しかし、調べてみると、大和川は水質改善の取り組みにより平成二十二、二十三年には、国が管理する一級河川の中で「過去十年間で水質が大幅に改善されている河川」で全国第一位になるなど水質の改善が進んでいた。

私は驚いた。地域の人たちの努力により、これでもきれいになってきているのである。私たちは毎日大量の排水を発生させており、それを処理するのも難しいと思う。しかし、有機汚濁の指標によると、大和川では近年大幅に改善されているというのである。その原因は、浄水設備が整ってきたからだと考えら

れる。

小学生のときに、浄水場の方に浄水の仕組みの話をついたことがある。水をきれいにするには、汚れを沈殿させ、これを分解するのにたくさんさんの時間が掛かるそうだった。また、水をろ過や煮沸などせず直接飲む場合、水が土に触れたり、プランクトンや藻が発生すると飲めないそうだった。ということは、日本など浄水設備が整っている場所では飲み水や生活用水を得られるが、浄水設備が整っていない地域ではどうなるのだろうか。

実際に、浄水設備が整っていない地域では感染症リスクが高くなり、新生児も含め多くの人々がなくなっている。浄水設備の整っていない地域では、そこから引き起こされる感染症の流行、農業の困難、そこから発生する貧困、教育の困難、経済不安定から治安の悪化、といった様々な問題に繋がっている。

英語の授業で習ったことが腑に落ちた。川「river」の語源は、水を巡って争うライバル「rival」だそうだった。水が汚いという問題

以前に、水が少ない地域も多い。むしろ、日本のように常に豊富に水を使用できる地域が

珍しいようだった。

例えば雨水を溜められず治水が行われていない場所、砂漠など雨が降らない場所、上流で水が独占されてしまった場所では、古くから水を巡る「水紛争」が起きた。日本でも、我田引水ということがある。

これから地球温暖化が進むと、砂漠地帯や水が不足する地帯が増えていくと思う。それは人間だけの問題ではなく、川の生き物にも影響を与える。きれいな淡水でしか生きられない魚は今も減りつつある。そうすると、水辺だけではなく陸地で暮らす動物にも影響が出るのではないだろうか。

生きていくために必要不可欠な水、大切な水を守るために、水について関心を持ち、節水を心がけ、汚水を減らす努力を続けていきたい。そのために、水を蛇口から出さなければいけない、流しに油や調味料を流さないなど、自分が出ることから一つ一つ続けていきたい。